ALPS Interview

医療型短期入所施設　もみじの家　ハウスマネージャー

内多 勝康 さん

私がアナウンサーから福祉の現場に転職した理由

NHKのアナウンサーとして、全国放送の「生活ほっとモーニング」をはじめ数々の番組で活躍されていた内多勝康さん。53歳の時、それまでとは全く異なる障がい者福祉の世界に飛び込んだ。定年まであと7年という時期に、なぜそのような思い切った決断をしたのか？　現在の心境は？　話を伺った。

PROFILE >

【うちだ・かつやす】1963年、東京都出身。1986年、東京大学教育学部を卒業後、アナウンサーとしてＮＨＫに入局。初任地は高松放送局。東京アナウンス室では、全国放送の「生活ほっとモーニング」をはじめ関東ローカル番組の「首都圏ニュース845」「首都圏ネットワーク」などでキャスターを務めた。2013年、国家資格である「社会福祉士」の資格を取得。2016年3月、30年間勤めたＮＨＫを退職し、同年４月、国立成育医療研究センターもみじの家のハウスマネージャーに就任。著書に『言葉はライブだ！』（2009年、岩崎書店）、『「医療的ケア」の必要な子どもたち』（2018年、ミネルヴァ書房）がある。

当時、障がい者福祉の世界には全く関心がありませんでした。

――内多さんはＮＨＫのアナウンサーとして30年間ご活躍されていましたが、アナウンサーになろうと思われたきっかけは何だったのですか。

もともとはディレクター希望だったんです。テレビ業界に関心を持っていたので民間放送も含めて受験しましたが、すべてディレクター希望でした。その中でＮＨＫだけエントリーシートに第４希望まで書ける欄があって、第１希望はディレクターと書くわけですが、それ以外は何でもよかったんです。目が悪いからカメラマンは無理だろうとか消去法で考えていって、第２希望はアナウンサーと書きました。

――なぜ、アナウンサーとして採用されたのでしょうね。声質が良かったとか？

同期のアナウンサーの多くはアナウンサーを第一希望にしていなかったようです。はっきりとした理由はわかりませんが、それまでの画一的なイメージとは違うアナウンサーを育成していくべきじゃないかという流れがあったようです。いずれにしても、思いがけずアナウンサーになってしまい、自分でもびっくりしました。

――初任地の高松放送局では、どのような仕事をされたのですか。

ニュースを読む仕事がメインですが、時には外へ出て中継をしたり、インタビューをする仕事もありました。新人アナウンサーにとっては必修科目と言える、高校野球の実況中継もしましたね。

その一方で、私はディレクター希望という根っこを持ち続けていました。1日中ニュースを読む日もあるけれど、自由に仕事ができる日もあります。そんな日はアナウンサーでもどんどん取材に行って来いという空気があったので、何かニュースのネタがないか探していました。

――ネタを見つけてどうされるのですか。

良いネタが見つかると「企画書を書いてみろ」となって、その提案が通ると、カメラマンや音声、映像編集のスタッフたちと一緒に1本のニュース企画や番組を作っていくことになります。各分野のプロフェッショナルだから、アドバイスをくれるし、すごく良いものに仕上げてくれます。そうした経験を通して放送のイロハを学んでいきました。

――そのような中、何かご自身のテーマを見つけられたのですか。

最初からテーマがあったわけではありません。高松放送局では若手アナウンサーの担当業務として、高松ボランティア協会が主催するお祭りの司会がありました。「障がいのある人もない人も一緒に生きていこう」というテーマのお祭りです。

それまで私の周りには障がいのある人がいなかったこともあり、当時、障がい者福祉の世界には全く関心がありませんでした。

高松ボランティア協会のお祭りで出迎えてくれた事務局長さんは、脳性まひの女性でした。話し方が独特で最初は会話をすることが難しいなと感じたのですが、だんだんコミュニケーションも取れるようになって、そこから自然と障がいのある人との接点ができていきました。

社会の中で生きづらさを感じている障がい者はたくさんいますし、解決しなきゃいけない問題は山積しています。掘れば掘るほど奥が深く、社会的課題を幾重にも抱えている現場であることは間違いありませんでした。番組のネタを探していた私は、事務局長さんと仲良くなって、企画になりそうなネタが見つかれば、現場に足を運び、取材を続けました。そういう流れから、自然と障がい者福祉が私のフィールドになっていったのです。

――例えば、どんなネタがあったのですか。

ある時、行政の支援を受けて運行されている福祉タクシーが、財政難を理由に廃止されるかもしれないという情報が入ってきました。企画提案が通ったので、さっそく取材開始しました。福祉タクシーが廃止されると外出ができず社会との接点がなくな

るという車椅子の男性にインタビューする一方、福祉タクシーを運営する側の厳しい事情も取材し、ローカル放送のニュース番組のリポートという形で「存続してほしい」というメッセージを発信しました。

その後しばらくしてから、福祉タクシーが存続されるというニュースが耳に入ってきました。私が取材したリポートとの因果関係はわかりませんが、〝廃止から存続へ〟という流れの中に自分が関係することができたかなと。そこが嬉しかったんですよね。社会が少し動く時に自分が責任をもって関われる仕事ってすごく魅力があるなと感じました。

――それ以降、ご自身のテーマは〝障がい者福祉〟に絞られたのですか。

環境問題が盛り上がれば関心をもったり、バラエティ番組の仕事が楽しくなったり、いろいろ揺れましたけれども、大阪、東京と転勤するごとに障がい者福祉の人脈が広がっていって、結局、障がい者福祉に戻っていきましたね。

――障がい者福祉分野のドキュメンタリー番組制作にも関わられたそうですが…。

東京アナウンス室にいた頃、重い自閉症の男性が川崎市で公務員として働いているという情報が入ってきました。障がい者枠ではなく、一般の人と同じ採用試験をパスして公務員になった男性がいると。

自閉症について正確に知らなった私は、その男性の自宅に会いに行った時、唖然としました。会話は成立しないし、家の中で落ち着きなく動き回っているし、「本当に仕事ができているのだろうか？」と疑問に思いました。さっそく彼の勤務先である老人ホームへ行ってみると、まるで別人のように仕事に打ち込む姿を目の当たりにしたのです。

社会が少し動く時に自分が責任をもって関われる仕事ってすごく魅力があるなと感じました。

その老人ホームでは山のように積まれたタオルを畳まなければならないのですが、彼はこだわりが強いからピシッと丁寧に畳むわけです。水が好きだから風呂の掃除も大好きでピカピカに磨き上げるし、車椅子もきれいに拭いていました。

――それはすごいですね。

聞けば、老人ホームでは彼を受け入れるにあたり組織として体制や業務フローをしっかり構築したということでした。そうやって働きやすい環境を整えることで、重い自閉症でも仕事ができる。生き生きと働く彼の姿を見て、私の中の既成概念は完全にぶっ壊されました。「これは番組になる。提案するしかない」と思いました。

――提案は受け入れられたのですね。

私にとっては初めてとなる、全国放送のドキュメンタリー番組を制作することになりました。彼の職場での仕事ぶり、自宅での姿を密着取材し、飾ることなくそのまま放送しました。番組では「自閉症の人がもつこだわりを無理やり封じ込めず、長所として活かすことができれば、こんなに重い障がいがあっても地域の中で家族と一緒にハッピーに暮らせますよ」というメッセージを伝えたかったのです。

――番組に対しどんな反響がありましたか。

自閉症のお子さんをもつ親御さんたちから「こんな風に生きてもいいんだと思った」という声が数多く寄せられ、それがすごく嬉しかったですね。一つの番組によって人の生き方や考え方が大きく変わると実感できたのは、あの時が初めてかもしれません。

――自分が関わった番組で、もしかしたら社会を少し変えられたかもしれないと。

そこに近づけたかもしれないという手応えはありました。「これまでにない視点の番組を作ってくれてありがとう」と言われましたし、障がい者福祉の世界で評判になり「番組制作の秘話を聞かせてほしい」と講演にも呼ばれるようになりました。

――手応えを感じる仕事をされる中で年月を重ね、50歳を過ぎるとその先の道筋も見えてくるわけですよね。

アナウンサーの諸先輩方は、ＮＨＫ放送

ALPS Interview

やりたい仕事はあきらめて、言われた仕事を粛々とやっていこうと。

研修センターが運営する日本語センターに籍を移して、アナウンスの指導をしたり、テキストを執筆したりされていたので、私も将来そうなるのかなと思っていました。

――そこからどのような経緯で、現在の仕事に結びついていったのですか。

30代後半から40代にかけて「首都圏ネットワーク」や「生活ほっとモーニング」などの番組でキャスターを務めているうちは、アナウンス業務がメインではあるものの、時には自分の提案が通る可能性もありました。やりがいもありましたし、仕事も楽しかったのですが、50歳を迎える頃になるとだんだん後進に道を譲ることが多くなっていきました。自分の希望が通らなくなっていった。

でも、それは仕方がないことだと思っていました。やりたい仕事はあきらめて、言われた仕事を粛々とやっていこうと。福祉に関わりたいなら、オフの日にボランティアで参加したり、定年後の仕事にしようと。社会福祉士の資格も取得していましたので、それが武器になればいいと思っていました。

そうやって自分の中で一度気持ちの整理をつけた時に、「国立成育医療研究センターが新設するもみじの家のハウスマネージャー（職場長）になりませんか？」という話を頂いたのです。

――もみじの家は医療的ケア児と家族のための短期入所施設だそうですが、医療的ケア児と重症心身障害児は異なるのでしょうか。

「重症心身障害児」は、重い知的障がいと重い身体障がいが重複した子どもで、「障害福祉サービス」で発達に必要な支援を受けることができます。

一方、「医療的ケア児」は病院を退院した後も医療が必要な子どもたちです。痰の吸引や人工呼吸器が不可欠だったり、チューブを通して栄養を注入している子どもたちがいますが、これらは医療行為にあたります。

近年、生後間もなく医療的ケアが必要となる子どもが急速に増えています。以前であれば医療行為が必要な子どもは、ずっと入院していなければなりませんでしたが、医療の進歩によりまだ医療行為が必要でも、病状が安定したら退院していきます。

自宅に帰った子どもたちの医療的ケアを背負うのは家族であり主にお母さんです。24時間、３６５日、子どもの命を守るケアに気が休まらない日々が何年も続くという過酷な状況で、お母さんや家族たちは心身ともに追い詰められているのです。

――内多さんが医療的ケア児に初めて関わられたのは、いつだったのですか。

50歳の時、代行キャスターとして担当した「クローズアップ現代」でした。社会問題など時代の〝今〟を伝える報道情報番組で何か提案できないかといろいろ調べる中、医療的ケア児に関する情報を入手しました。深刻化する医療的ケア児の問題を、医療と福祉の専門家がチームを組んで、しっかり支えていこうとする動きがあったのです。

――医療と福祉がチームを組むことで、どのような効果が期待できるのでしょうか。

入院中は〝医療〟で、退院後は〝福祉〟といった具合に、医療と福祉の分野は分けられています。ですが、医療的ケア児の場合は退院後も医療が必要だから、そこが分かれていると子どもたちの適切なケアはできません。現場で働く人たちはそのことを痛切に感じていて、「このままじゃいけないから、一緒にやっていこう」と動き出していました。

その新しい動きを誰よりも早く放送したいと、すぐに提案しました。「医療的ケア」という言葉自体がまだよく知られていなかった当時、テーマとして地味だと捉えられがちだったけれども、番組スタッフたちが「大事な問題だからやろう」と言ってくれて、取り上げることができました。

――取材にも同行されたのですか。

そうですね。取材では医療的ケア児を抱えるお母さんたちにインタビューをし、スタジオでは専門家に話を伺いました。

――反響はいかがでしたか。

放送されたことで直接何かが動いたわけではありませんが、それまで光が当たってこなかった問題に、きちんと光を当てたところに意味があったと思います。

医療的ケア児を支えるお母さんたちは、それまで一人で悩みを深めながら、どこにも発信できず苦しんでいたそうです。番組が放送されたことでそれが変わったと。

――その話はいつ聞かれたのですか。

その時々の動きが、だんだんと大きな渦になって〝今〟につながっている。

取材当時はインタビューして終わりだったのですが、その後お母さんたちと再会する機会があり、「内多さんがあの時いろいろ聞いてくれたので、自分たちのことを話してもいいんだと思った。ずっとあきらめモードだったけれど、そこからギアが変わって、親同士のネットワークを作っていこう、行政の人とも話し合っていこうという流れになった」という話を聞きました。

私は仕事だからインタビューしたのだけれど、インタビューすること自体にもそういう効果があったのかと驚きました。

――インタビューされたことが、人を動かすきっかけとなったのですね。

急に何かが変わったわけじゃないけれども、その時々の動きが、だんだんと大きな渦になって〝今〟につながっている。そこに私も番組を通して関われたんじゃないかと思いました。それが転職にまで結びつくとは、夢にも思っていませんでしたけれど。

大きな窓から明るい光が差し込む「もみじの家」。職員たちのサポートを受け、子どもたちが元気に過ごす

——もみじの家のハウスマネージャーを打診された時は、どう思われましたか。

ずっと取り組んできた障がい者福祉の世界であり、医療的ケア児や家族の在宅生活を支える事業の立ち上げに、何の実務経験もない私を誘ってくださるとは、願ってもない話だと思いました。

しかも、仕事で障がい者福祉に関わることをあきらめた直後でしたから、おいしい人参に見えるわけですよ。腹ペコだったから、パクッといった。でも、見た目ほど甘くはなかったというのがオチですけどね（笑）。非常に苦い人参だったと。

——仕事内容としてはやりたかったことでしょうが、収入は減ったんじゃないですか。

もみじの家は国立成育医療研究センターの一機関という位置づけで、私は常勤職員として働いています。以前に比べ収入は多少減りましたが、身分は安定しています。

転職を考えていた当時、まだ大学生だった2人の子どもの学費がいくらかかるか、退職金はいくらで、転職後の収入はどうなるのか全部算盤をはじいて転職後の家計の収支予測をしたところ、何とかなるという結論に至りました。その結論をもとに退職の意志を固め、妻に相談したところ「いいんじゃない」と言ってくれました。妻の反対を押し切ってまで転職することはなかったと思いますので、納得してくれて感謝ですね。

——「ハウスマネージャー」とは、具体的にどのような仕事をされるのですか。

仕事の柱の一つは事業計画を立てることです。「もみじの家」という施設の収支状況や利用者の推移などをまとめた上で、年間計画を立て、現在の全体像がわかる資料を作成します。これを使って、国立成育医療研究センターの上層部や寄附をしてくださった方々に説明をしなければなりません。きちんとした資料作成は大事な仕事なのですが、アナウンサー時代にはそんな経験ありませんでしたからね。戸惑いました。

——番組の提案書を作成する際はパソコンを使われていたのですよね。

Ｗｏｒｄで十分事足りましたからＷｏｒｄしか使えなかったのです。でも、収支状況や利用者の推移などグラフを扱うためにはＥｘｃｅｌが必要不可欠です。最初の年は周囲の職員が見るに見かねて作成して

妻の反対を押し切ってまで転職することはなかったと思いますので、納得してくれて感謝ですね。

関係者に配付される「もみじの家」のニュースレター。企画編集から原稿依頼、執筆まですべてを内多さんが担当している

仕事のサイクルが体に染みこんでくると、次にどう動けばいいかが予測できるようになりました。

くれましたが、すごい劣等感がありました。50歳を過ぎて何の役にも立たないというのは、非常にショッキングですよ。

「これまでと全く異なる分野に転職するのだから苦労するだろう」ということは頭の中では理解していましたけれど、次から次に何の役にも立たないという状況が続いたので、かなりつらかったですね。

アナウンサー時代も新人の頃は怒られましたよ。でも、その後は怒られることなんてありませんでしたから、「怒られるというのはこんなにつらいことなのか」と。これは想像を超えたつらさでしたね。

——そこで心が折れなかったのですか。

折れましたね、何回か。折れてもNHKに戻れるわけじゃないから、辞めることもできない。行き場がないから、つらくてもやるしかないですよ。それに、転職してすぐ辞めたら、あまりにもカッコ悪いでしょ。

——その後、仕事には慣れられたのですか。

4年目を迎えて、資料作成などルーチンワークは慣れてきて、苦痛ではなくなりました。事務量が結構多くてヒーヒー言っている部分はありますが、ノウハウとしてはそれほど苦労しなくなりましたね。

最初の1年が過ぎて仕事のサイクルが体に染みこんでくると、次にどう動けばいいかが予測できるようになり、そのためのスキルも身について、だんだん良い方向に転がっていきました。

——もみじの家は看護師や保育士など専門職の方が多いので、それ以外の仕事をすべて引き受けていらっしゃるのですか。

専門職のスタッフには各自の仕事に専念してもらいたいので、それ以外の仕事は事務長と私で担っていますし、看護師長も力になってくれて助かっています。私は広報や寄附のお願いで外へ出かけることもありますが、基本的には事務室にこもってパソコンと格闘している時間が長いです。

——現在の仕事で、やりがいを感じられるのはどんな時ですか。

まだ何の成果も上げていないので、その質問が一番つらいですね。私は資格がないから子どもたちの直接的なケアはしないけれども、子どもたちや家族が喜んでくれている姿を見たり、「こういう施設を待ち望んでいました！」「これでまた明日から頑張れます！」と言ってくださる方がたくさんいるので、その声を聞くと嬉しいです。

もちろん直接的なケアは大事ですが、後方で支える人材がいなければ施設は維持できません。全体がチームとなって3年間守ってこられたことは良かったと思っています。

ただ、現在の経営状況では、民間企業や個人の方の寄附にも頼らざるを得ません。今後、収支が安定し、もみじの家のような施設が各地に広がる動きが出てくれば、やりがいを実感できるかもしれませんね。

——仕事に対する向き合い方は、アナウンサー時代と比べ何か変わりましたか。

『「医療的ケア」の必要な子どもたち』
（内多 勝康 著、ミネルヴァ書房刊、
2018年8月、2,200円+税）

変わっていませんね。大阪放送局にいた頃、阪神・淡路大震災の緊急報道を担当したことがあったんです。その時、「誰に対して情報を出すのか」について真剣に考えました。被災者のために仕事をしているのに、このニュースで本当にいいのかと。それ以来、常に「誰のための放送なのか」ということを強く意識するようになりました。

今、私は「医療的ケア児と家族のために」ということを常に意識して仕事に臨んでいますが、ハウスマネージャーとして結構な額の赤字を目の前にすると、効率を重視するあまり、子どもたちへのサービスの量や質を割り引く発想が生まれても不思議ではありません。それでも「医療的ケア児と家族のために仕事をする」というベースがブレないのは、阪神・淡路大震災の緊急報道での経験が生きているからではないかと感じています。

――「誰のために」という点で同じだと。

そこは仕事をする上でベースになっている気がします。仕事のノウハウは違うけれども、自分の中の基準はそれほど変わっていないのではないか。だからこそ、転職できたんじゃないかと思います。もし自分の理念に反するような仕事を提示されていたら、気持ちも動かなかったでしょう。

それに仕事への向き合い方を変えたくないから転職してきた部分もあります。50代になれば、仕事への向き合い方を変えざるを得ないことも多々あります。自分の中のベクトルを変えなくていいところに魅力を感じて、転職できたのかもしれません。

――現在の職場の定年は何歳ですか。

60歳です。延長の可能性もあるようですが、その時になってみないとわかりませんからね。〝60歳まで〟となるとあと4年しかないので、結構急いでいるんですよ。

――何を急がれているのですか。

私にとって最大のテーマは赤字解消です。もみじの家の目標は、医療的ケア児と家族が安心して利用できる短期入所施設を広げていくことです。ですが、赤字が出ているようでは広がっていきません。だから赤字をゼロにしたい。そのためには制度が必要です。

もみじの家の主な収入は、国の制度が報酬を規定している「障害福祉サービス費」です。報酬改定は3年に1回行われていて、次の改定時期となる2年後、私は58歳ですが、その次の改定時期は61歳です。そう考えると、2年後の報酬改定が私にとって本当の正念場です。

そのためには、なぜ、この施設が赤字なのか、どういう制度があれば持続可能なのか、どういう効果があるから制度を変えなければいけないのかという説明を、説得力のあるものにしなければなりません。同時に、同様の事業に携わられている諸先輩方たちと声を一つにして大きな流れを創り、その先に新しい制度ができることを、最大の目標にしています。

――大きな目標があるから、頑張れる部分もあるわけですね。

「重い病気や障がいがあっても、その人らしく生きられる社会を創る」ことが、もみじの家の理念です。その理念に私も心から共感しましたし、その実現に向けて少しでも力になりたいので、がむしゃらにやるしかありません。

これまでの自分のキャリアを振り返ってみると、すべてが、ここに来るための長い助走期間だったような気がします。仕事のノウハウや人脈がつながって、運命的にここにたどり着いた感覚です。どんな成果が出るかわかりませんが、定年を間近に控えて何もしないまま時間が過ぎるのはもったいない。とにかく動きながら考えて、何か突破できればと思っています。

――異業種への転職でありながら、実は一本の道が続いていたのかもしれませんね。率直にお話しいただき、ありがとうございました。今後のご活躍をお祈りいたします。

（インタビュアー／ライター　更田沙良）

定年を間近に控えて何もしないまま時間が過ぎるのはもったいない。